

鹿児島県総合教育センター
平成24年度長期研修研究報告書

研究主題

文学的文章を主体的に解釈できる子どもの育成

—読解と表現を関連付けた「読むこと」の指導を通して—



さつま町立盈進小学校
教諭 福元 真太郎

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	1
1	研究のねらい	1
2	研究の仮説	2
3	研究の計画	2
III	研究の実際	2
1	研究主題に関する基本的な考え方	2
(1)	文学を学ぶ意義	2
(2)	「文学を主体的に解釈する」とは	3
(3)	「読解」と「表現」の関連について	4
(4)	解釈のための交流活動	4
2	国語科学習に関する実態調査と分析	5
(1)	調査の概要	5
(2)	調査結果と分析	5
3	文学的文章を主体的に解釈する能力を高める授業の構想	6
(1)	主体的な解釈の育成を図る系統表	6
(2)	「読むこと」を中心とした領域相互の関連について	6
(3)	読むことを中心とした領域の関連を図る年間指導計画の作成	8
(4)	学習過程の工夫	9
(5)	子どもが文学的文章を主体的に解釈するための手立て	10
4	検証授業の実施と考察	13
(1)	検証授業ⅠとⅡの関連	13
(2)	検証授業Ⅱの概要	14
(3)	指導計画	15
(4)	授業の実際と考察	16
(5)	解説書に表現された解説文の考察	22
(6)	子どもの学習後の意識	23
(7)	検証授業の成果と課題	26
IV	研究のまとめ	27
1	研究の成果	27
2	今度の課題	28

I 研究主題設定の理由

文学的文章を読み深めることは、日常生活において自分の考えを広げたり深めたりするとともに、豊かな想像力と人間性の育成にもつながるものである。文学の学習を通して身に付いた力は、これからの学習の基盤となったり、意欲的な読書生活へとつながったりして、子どもの生活に大いに役立つであろうと思われる。したがって、子どもに文学を読み深め、主体的に解釈する力を付ける研究は、意義があると言える。その有効な手段として、文学を読んで考えたことを表現し交流することで更に深めさせることが考えられる。

学習指導要領では、思考力・判断力・表現力等を育成するために、全ての教科等において言語活動を充実させることがあげられるなど、言語の教育が果たす役割はますます重要視されている。小学校国語科においては、「言語の教育としての立場を一層重視し、(中略)各教科等の学習の基本となる国語の能力を身に付けること」が改訂の趣旨となっている。

本校児童の国語科に関する調査結果は、平成23年度「基礎・基本」定着度調査によると「読むこと」の通過率が62.5%と領域別に見ると最も低く、中でも文学的文章を読む問題については、通過率が57.7%である。これは、県の平均通過率61.9%より4.2ポイントも低い結果となっている。また、普段の学習状況を見てみると、文学的文章教材の読解が十分にできず、作品のよさを感じることができないでいる子どもが多い。

以上のような課題と児童の発達の段階を考慮し、本研究では対象児童を第6学年に設定することとした。対象となる児童に対するこれまでの国語科の授業では、「読むこと(文学的文章)」において、伝記から人物像を読み取り、同じ観点で複数の伝記を読むという読書活動へつなげる指導や物語の構成から効果話し合い、創作文を書く指導等を行ってきた。これらの学習を通して、意欲的に学習に取り組むようになり、文学のおもしろさに気付くようになったりしたという成果がある一方、読んだことを自分の言葉で表現できずに読みを深められなかったなどの課題が見られた。その要因としては、読解と表現が関連付けられていなかったことや、学習内容の系統を意識した指導計画になっていなかったことが考えられる。表現するという行為は、自分の考えを確かなものにし、それを整理して、相手に伝えることである。相手が分かるように自分の考えを整えることが更なる読みの深まりへと発展する。したがって、読みが深まるよう読解したことを基に、自分の考えを形成し表現する指導が必要であると考え。

これらのことから、文学的文章の指導においては「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の三つの領域で習得した知識・技能も効果的に活用できるよう年間を通した計画的な指導が必要であると考え。また一単元の指導においては、読みの目的や必要性を明確にした上で、読解に表現と交流を関連付けながら考えを深めさせる言語活動を通して、子どもが主体性を発揮し、自らの考えを広げたり深めたりした作品を作り出すところまでを視野に入れた指導が必要である。

そこで、文学的文章の指導において、学習内容の系統が図られた年間指導計画を具現化したり、言語活動を充実させ、読解と表現を関連付けたりすれば、文学を主体的に解釈できる子どもの育成につながるものと考え、本主題を設定した。

II 研究の構想

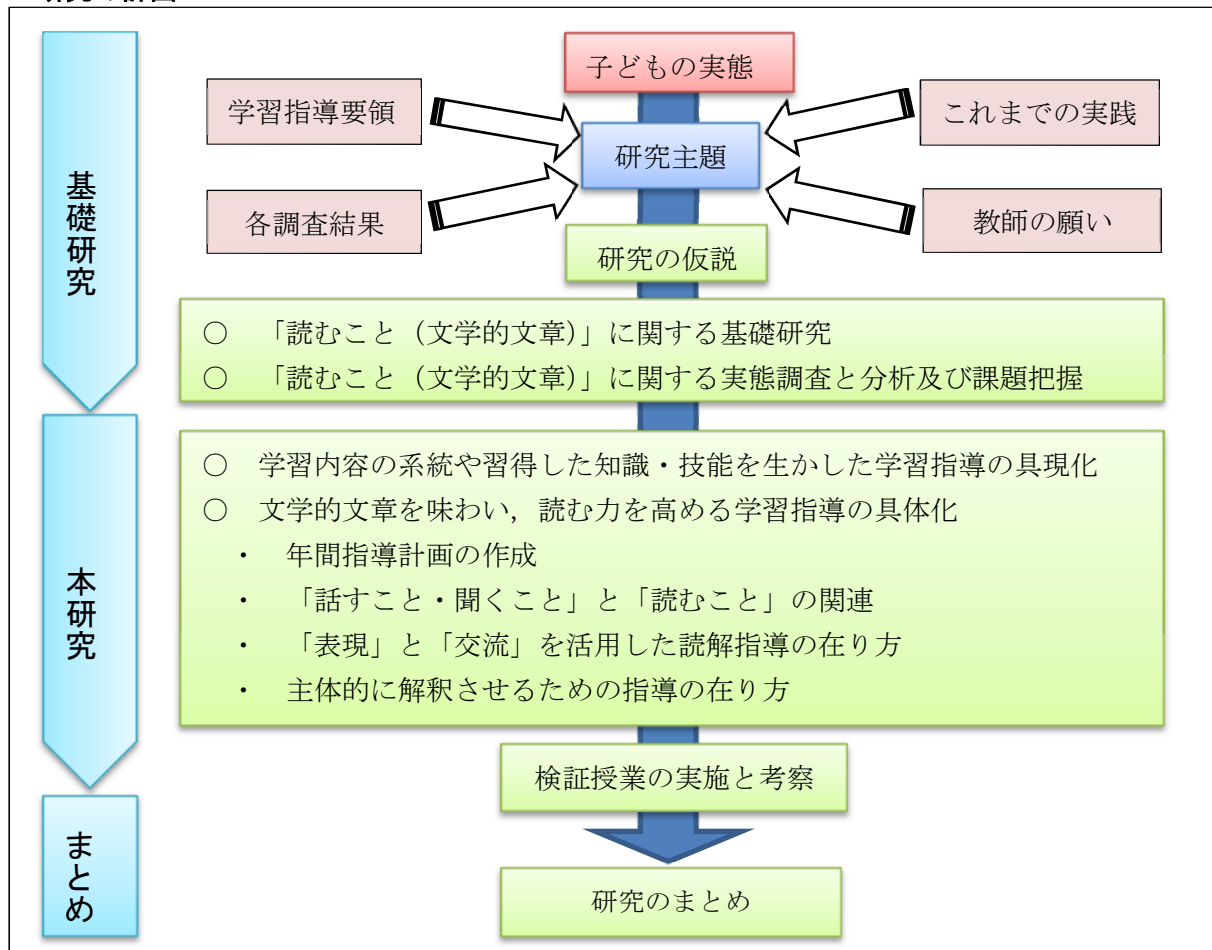
1 研究のねらい

- (1) 学習指導要領や文献、先行研究を基に、文学的文章の主体的な解釈について明らかにする。
- (2) 児童と教師を対象にした実態調査とその分析を行い、課題を明らかにする。
- (3) 学習内容の系統と習得した知識・技能を活用した年間指導計画の在り方を研究し具現化する。
- (4) 読解と表現の関連及び指導の在り方を明らかにする。
- (5) 検証授業の分析を基に、研究の成果と今後の課題を明らかにする。

2 研究の仮説

学習内容の系統を踏まえて、習得した知識・技能の活用を図る年間指導計画を作成し、読解と表現を関連付けた指導を行うならば、子どもに文学的文章を主体的に解釈できる力を育成できるのではないか。

3 研究の計画



Ⅲ 研究の実際

1 研究主題に関する基本的な考え方

(1) 文学を学ぶ意義

国語科の学習において文学を学ぶことは、国語科の目標にあるように思考力や想像力を養うことにつながると考える。それでは、国語科で文学を学習することが、生活の場においてどのように生かされ、子どもの将来に役立っていくのであろうか。

飛田¹(1972)は、著書の中で文学の機能を「文学形象にこめられている美的価値」、「文学の作品が語る内容的・倫理的価値」、「作品と享受主体との心情のふれあい」の3点であるとした上で、文学を学ぶ意義を「真の意味における文学のおもしろさに触れることによって生活の楽しみを得、人間的真實を凝視することによって自らの生き方に資するということである。いわば、価値ある間接体験によって、精神的糧を得つつ人間を探究するという人生的意義を文学に求めているのである。ここに人間が、意識すると否とにかかわらず、かけがえのない価値体験としてひたすらに文学を求めることの意義がある」と述べている。

¹ 飛田多喜雄 著『想像力を伸ばす文学指導法の開発』1972 明治図書

また、岩田²(1990)は著書の中で「われわれが文学作品を読むのは、その作品の世界に没入して現実の世界のストレスを解消するためではない。そこに登場する人物の生き方、考え方に新鮮さを感じ、人間や社会に対する新しい見方、考え方を学ぶためである。あるいは、そこに登場する人物の生き方・考え方に不満をもち、怒りをもって批判することによって、自分の生き方の正しさを確認し、本当の正しい生き方を見つけ出していく、正しい人間観・社会観を発見していくのである。」と述べている。

さらに小野³(2011)は、文学は「他者との共感を可能にする」、「世界について知る」、「母語の感度を高める」有効な手段であると述べている。

これらのことから、文学を学ぶ意義を次のように考えた。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">○ 主として読解力が身に付いたり向上したりして、思考力や想像力が養われる。○ 言葉の感性を磨き、母語のよさを実感することができる。○ 正しい人間観・社会観を身に付けることができる。○ 新しい考えを生み出し、自らの生き方や考え方に生かすことができる。 |
|---|

文学を学ぶことは単に学力を向上させたり、想像力を養ったりすることにとどまらない。それは、豊かな人間性を養い、自らのものの見方や生き方にまで敷衍していくものであると考えられる。

(2) 「文学を主体的に解釈する」とは

「主体的」とは、課題意識をもち、見通しをもって意欲的に学習している姿と捉えている。子どもが主体的に学習に取り組むためには、まず一人一人が課題意識をもち、学習のまとめに行う表現活動(単元を貫く言語活動)をイメージし、その単元の学習を通して身に付けたい力を見据えることが大事である。子どもが学習の目的を明確にもつことで、学習に見通しがもてるようになる。また、学習に楽しさを見だし、感じることも大事な要素であろう。このようにして、学習の必要性を感じさせることによって、主体的な読みへとつながっていくと考える。

小学校学習指導要領「読むこと」の指導事項を見ると、文学的文章に関する記述が「文学的な文章の解釈に関する」となっている。これまで存在した読解を意味する「読み取り」の言葉がなくなり、「解釈」という言葉が使われるようになった。小学校学習指導要領解説によると文章の解釈とは、「本や文章に書かれた内容を理解し意味付けること」であり、具体的には、「今までの読書経験や体験などを踏まえ、内容や表現を、想像、分析、比較、対照、推論などによって相互に関連付けて読んでいく。文章の内容や構造を理解したり、その文章の特徴を把握したり、書き手の意図を推論したりしながら、読み手は自分の目的や意図に応じて考えをまとめたり深めたりしていくこと」とある。本研究では「文学的文章の解釈」を「課題意識と必要感をもって学習に取り組み、身に付けた知識・技能を活用し、叙述を基に推論しながら自分なりの意見や考えを意味付けていくこと」と捉えることにした。

読解について桑原⁴(1998)は、「主体的な読書活動において、躓いたり理解できない部分や文章に出合ったとき、読みのスピードを落としたり前に戻って読み返しをしながら、その部分を解明する作業」としている。さらに、同氏は「読解指導」を「学習者自身の問題意識とは遊離し、作品や文章において、ある部分に照射して分析的に紐解いていく指導」としている。

読解と解釈は截然と区別できるものではないが、本研究では「解釈」は「読解」よりも主体的で、自らの考えが前面に押し出された形であり、主体的な解釈は、確かな読解の基に成り立

² 岩田道雄 著『読みの授業の基礎理論』1990 一光社

³ 日本学術会議 『日本学術会議資料』2011 日本学術会議

⁴ 桑原隆 著『言語活動主義・言語生活主義の探求』1998 東洋館出版社

つものであると捉えた。したがって、主体的に解釈できる能力の育成のためには、読解する力を身に付けさせることも必要であると言える。

(3) 「読解」と「表現」の関連について

学習指導要領では、国語の能力の根幹となる「表現力」と「理解力」は連続的かつ同時に機能するものであるとしている。これを踏まえると、読解と表現も連続的かつ同時的に行われるものであると考える。ここで言う「表現」とは、作品を読んで感じたことや思ったこと、考えたこと、意見等を文字や言葉に表すことを意味する。大村⁵は著書の中で読解力の指導に関して次のように述べている。「読みながら（中略）今までこう思っていたことがこういうふうに変わってきたとか（中略）そういうなにか心を動かされたことを書きとめるということにしました。（中略）子どもは何が書かれてあるか、受け取ったにちがいなく、同時に、受け取る力を加えたにちがいありません」。このように、読解の中に表現を関連付けることには効果が期待できると考えられるのである。具体的には、読解でつまづきを解明していくためには、叙述から推測したり、想像したりして判断する作業が必要になってくる。見方を変えれば、表現するためには、文章の内容についての正確な読解と自らの考えをまとめる力が必要となる。このような読解と表現が子どもの中で繰り返されることによって、断片的であったり感覚的であったりする子どもの考えは整理され、明確なものになる。「分かったことを表現する」のではなく、「分かるために表現する」のである。したがって、読解と表現は密接につながっており、表現することで読みが深まると言える。さらに、他者との交流を通すことで、共通点・相違点が明らかになり、読解したことが解釈へとつながるものとする（図1）。

(4) 解釈のための交流活動

読解を進めていく際、いわゆる「ひとり読み」の段階では、一面的な理解をしている場合がある。伝え合うことによって、そのような理解を指摘し、修正することができる。さらに、自分の見方や考え方を広げたり、深めたりすることもできる。このような交流を適切に行っていくことが主体的な解釈へとつながっていくものとする。また、他者との考えの

違いを実感するとともに、自分の考えを見つめ直し、自らの解釈を確かなものにするために、個での読解は全体での交流を経て再び個に返すようにすることが大切である。

以上のような基本的な考え方を踏まえ、目指す子ども像を以下のように設定した。

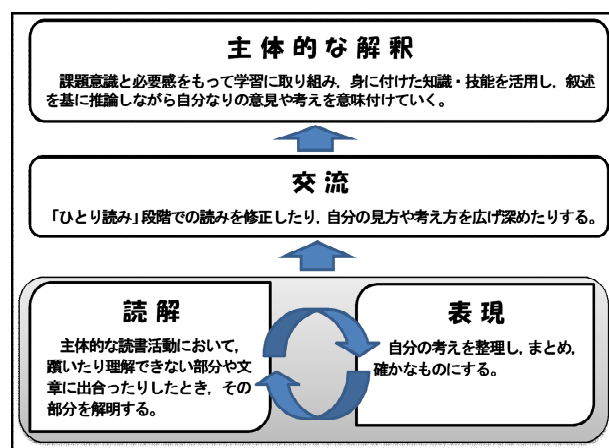


図1 「読解」「表現」「交流」「解釈」の流れ

課題意識と必要感をもって学習に取り組み、身に付けた知識・技能を活用し、叙述を基に推論しながら自分なりの意見や考えを意味付けていく子ども

- 学習の見通しと目的意識をもち、学習に取り組むことができる。 【主体性】
- 叙述を基に、登場人物の相互関係や心情、場面等を捉えることができる。 【読解】
- 自分の考えや意見を根拠を基に話したり書いたりすることができる。 【表現】
- 友達との話し合い活動等を通して、自分の考えを深めることができる。 【交流】

※以上の4点を高めることによって主体的な解釈につながっていくと捉えられる。

⁵ 大村はま 著『大村はまの国語教室②ーさまざまのくふう』 1983 小学館

2 国語科学習に関する実態調査と分析

(1) 調査の概要

研究に際し、児童の実態を把握するため「主体的な学習」「読解」「表現」「交流」と「国語科における学習の課題」についてアンケートを行った。また、児童と同じ内容の質問を教師にも行い、児童と教師の意識を比較することとした。

調査実施時期	平成 24 年 6 月
調査対象	さつま町立盈進小学校 学級担任 16 人，6 年児童 88 人
調査方法	質問紙法

(2) 調査結果と分析

「主体的な学習」に関する意識調査では、児童の 87%が「よくできる・大体できる」と回答しているのに対し、教師は「よくできる・大体できる」が 69%にとどまっている（図 2）。教師から見ると、児童の学習態度が受け身であると判断したものと思われる。児童については、自ら課題を見付け解決する学習の習慣化を、教師については、児童が主体的に学習できるような指導の工夫が必要である。

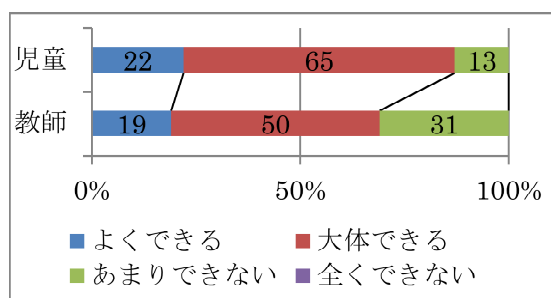


図 2 主体的に学習できているか

「読解」に関する意識調査では、児童の 82%が「よくできる・大体できる」と回答しているのに対し、教師は「大体できる」が 50%にとどまっている（図 3）。ここに意識のずれが見られる。児童はできていると考えていても教師は不十分と捉えている。教師が児童の考えるものよりも高い姿を目指していることが表れた結果であろうと推測される。

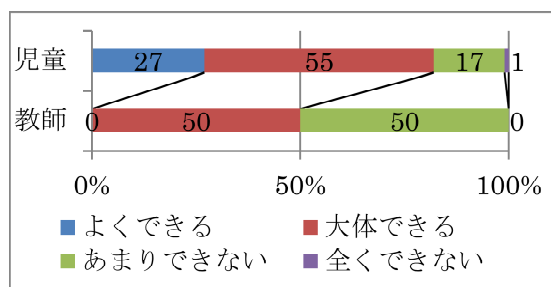


図 3 読解ができているか

「表現」に関する意識調査では、教師の 75%、児童の 73%が表現による読みの深まりを実感している（図 4）。しかし、児童への「友達や先生に考えをうまく伝えられているか」という問いに対しては、「うまく伝えられている・大体伝えられている」の回答は半分にとどまった（図 5）。このことから、表現の効果は理解しているものの、実際の活動における技能面に課題が見られることが分かる。

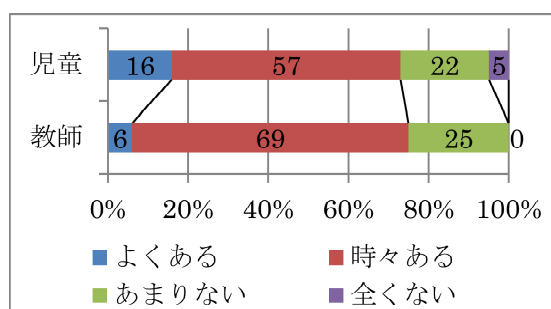


図 4 表現で読みが深まることあるか

「交流」に関する意識調査では、児童の結果に対し、教師のポイントは低くなっている（図 6）。これは「交流」の捉え方の違いが推測される。児童は友達の意見を聞くことで深まりを実感するが、教師は児童の内容面・技術面の更なる高まりや深まりを求め、それを目指している。この意識の違いが結果となって表れたものと思われる。しかしながら、交流の内容面や技術面には課題があると思われるものの、子どもは交流の効果を実感している。この実態を踏まえて

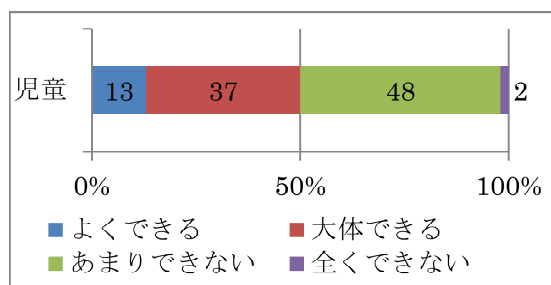


図 5 考えをうまく表現できているか

学習活動を工夫・改善していくことが大切である
と考える。

国語科における学習の課題については、「読解」は教師・児童共に6割程度、「表現」は7割近くが課題に挙げる結果となった（図7）。「交流」を課題に挙げる割合が最も少なく、児童で2割程度、教師で3割程度にとどまっている。しかしながらこれは必ずしも「交流」が十分に
行われていることを意味するものではなく、交流の
効果は分かっているものの、「交流」そのものに対する意識が低いことの表れである
と考える。交流により新しい発見をしたり、自分の読
みを深めたりできた実感を味わわせ、充実を図
っていくことが大切である。

以上のような結果から、児童と教師の意識の
ずれが少なからず見えてきた。教師と児童は、
学習時にはどんな力を付け、どのような状態に
なるようにすることが目的であるのかを共有す
ることが必要であろう。また、学習後には単元
を振り返り、相互評価をして達成感や成就感を味わわせることも必要だと考える。これら
の結果を受けて、①子どもの意識を主体的な解釈へ導くための課題設定の工夫、②子どもが正確に
読解できるようにするための指導、③自分の考えを表現できるようにするための手立て、④解釈
につながる交流活動、の4点に留意し、今後の研究を進めていく。

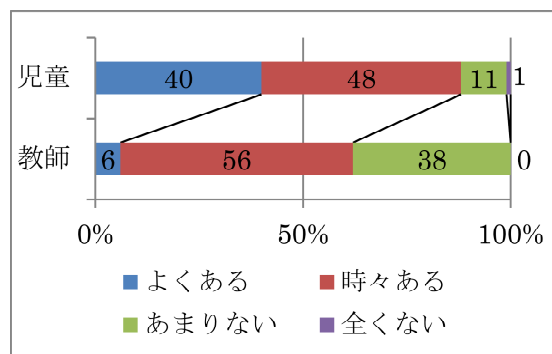


図6 交流で考えが深まることがあるか

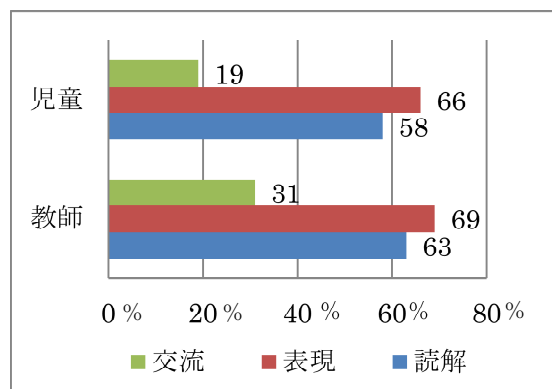


図7 学習の課題

3 文学的文章を主体的に解釈する能力を高める授業の構想

(1) 主体的な解釈の育成を図る系統表

まずは、各学年においてどのような指導を行っていくのかを捉えることが必要であると考えた。そこで、指導事項を捉えるとともに、指導事項の系統を捉えやすくするため、キーワードやキーセンテンスを抜き出した系統表を作成した。系統表は、学習指導要領の文学的な文章の解釈に関する指導事項を踏まえ、言語活動を通して、それを達成するためのものである。

また、本研究を進めていくにあたり、文献や先行研究を参考に身に付けさせたい力を設定した。身に付けさせたい力の観点、研究の視点である「主体性」、「読解」、「表現」、「交流」の4点から設定した（表1）。

(2) 「読むこと」を中心とした領域相互の関連について

学習において身に付いた力は、その後の学習のいずれかで活用することが望ましい。活用することで、身に付いた力は定着が図られ、学習については効果が上がるものと考えられる。しかし、身に付いた力をその後の学習で意図的・計画的に活用することは、重要なことではあるが、なかなか意識して指導が行われていないのが実情である。事前に行った調

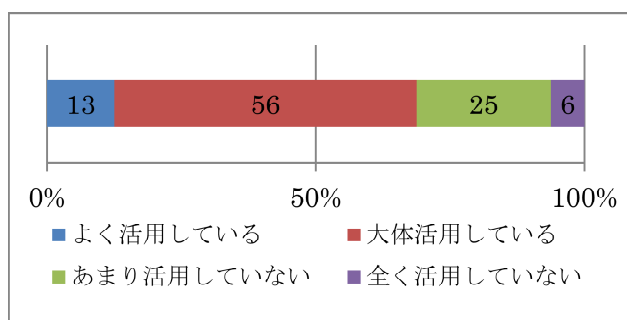


図8 子どもに習得させた知識や技能を活用しているか

表 1 文学的文章における主体的な解釈の育成を図る系統表《読むこと》

		第 1 学年及び第 2 学年	第 3 学年及び第 4 学年	第 5 学年及び第 6 学年
目標		書かれている事柄の順序や場面の様子に気付いたり想像を広げながら読む能力を身に付けさせるとともに 楽しんで読書しようとする態度を育てる。	目的に応じ、内容の中心をとらえたり段落相互の関係考えたり 読む能力を身に付けさせるとともに 幅広く読書しようとする態度を育てる。	目的に応じ、内容や要旨をとらえながら 読む能力を身に付けさせるとともに 読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる。
指導事項	文学的な文章の解釈	ウ 場面の様子 登場人物の行動 想像を広げながら読む	ウ 場面の移り変わり 性格 気持ちの変化 情景 叙述を基に想像して読む	エ 登場人物の相互関係 心情 場面についての描写 優れた叙述について自分の考えをまとめる
	主体的な解釈を支える力	主体性 読解 表現 交流	① 学習する内容を理解し、進んで学習に取り組むことができる。 ② 学習計画にそって、計画的に学習に取り組むことができる。 ① 叙述に即して場面の移り変わりやつながりを読むことができる。 ② 登場人物の人物や気持ちの変化、情景を想像しながら読むことができる。 ③ 段落の要点を抜き出し、小見出しを付けたりして、段落相互の関係や文章の中心を捉えることができる。 ① 文章を読んで考えたことをまとめることができる。 ② 引用したり要約したりして、自分の考えを発表できる。 ① 友達のよいところを見つけることができる。 ② 分からないことを質問できる。	① 学習の見通しと課題意識をもって、積極的に学習に取り組むことができる。 ② 学習の目的に合った計画を立て、最後まで取り組むことができる。 ① 登場人物の相互関係や心情、性格、考えなどを多面的にとらえて読むことができる。 ② 場面についての描写や効果的な表現に着目して読むことができる。 ③ 自らの考えの根拠となる情報を取り出すことができる。 ① 本や文章を読んで考えたことを書きながら整理し、まとめることができる。 ② 目的に合った様式に自分の考えをまとめ、発表できる。 ① 話し合いを通して、自分と友達の意見の共通点や相違点を見つけることができる。 ② 友だちの意見を理解し、自分の意見や考えを広げたり深めたりすることができる。
言語活動例		ア 本や文章を楽しんだり、想像を広げたりしながら読むこと。 イ 物語の読み聞かせを聞いたり、物語を演じたりすること。 ウ 事物の仕組みなどについて説明した本や文章を読むこと。 エ 物語や、科学的なことについて書いた本や文章を読んで感想を書くこと。 オ 読んだ本について、好きなところを紹介すること。	ア 物語を読み、感想を述べること。 イ 記録や報告の文章、図鑑や事典などを読んで利用すること。 ウ 記録や報告の文章を読んでまとめたものを読み合うこと。 エ 紹介したい本を取り上げて説明すること。 オ 必要な情報を得るために、読んだ内容に関連した他の本や文章などを読むこと。	ア 伝記を読み、自分の生き方について考えること。 イ 自分の課題を解決するために、意見を述べた文章や解説の文章などを利用すること。 ウ 編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読むこと。 エ 本を読んで推薦の文章を書くこと。

査でも、約3割の教師が「あまり活用していない・全く活用していない」と答えている（図8）。このような回答が得られた要因としては、教師が使用している年間指導計画自体が、単元ごとに指導が途切れてしまう構成になっており、関連が図られていないことが考えられる。

本研究では、「読むこと」の能力を高めるために、「読むこと」の学習において習得した基礎的・基本的な能力を活用することはもとより、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習において習得した能力を活用することも意識している（図9）。

例えば、6年「書くこと」の学習において、引用や図表を用いて自らの考えが伝わるように書く能力を身に付けたとする。その後の「読むこと」の学習に意見文を書く活動があったならば、引用や図表を用いた意見文を書くように意図的に指導することができる。また、「話すこと・聞くこと」の学習において、立場をはっきりさせて計画的に話し合う能力を身に付けていれば、読みを深めるための交流活動で生かすことができる。このようにして、同じ領域のみならず他領域で身に付けた基礎的・基本的な能力も活用していくことで効果を上げていきたいと考える。

年間指導計画についても、習得した能力を活用できるような構成にすることで、意図的・計画的に指導を行うことができると考える。

（3）読むことを中心とした領域の関連を図る年間指導計画の作成

領域の関連を図り習得した基礎的・基本的な知識・技能を活用するために年間指導計画を作成した（表2）。年間指導計画には「関連領域・単元」の欄を設け、既習の内容を生かして学習を進める場合と学習したことを以後の学習に生かす場合の両方を想定し計画を立てていった。

表2 読むことを中心とした領域の関連を図る年間指導計画例（一部抜粋）

目標		〇 目的に応じ、内容や要旨をとらえながら読む能力を身に付けさせるとともに、読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる。									
目指す子ども像		課題意識と必要感をもって学習に取り組み、身に付けた知識・技能を活用し、叙述を基に推論しながら自分なりの意見や考えを意味付けていく子ども ○ 学習の見通しと目的意識をもって学習に取り組み、学んだことを自分の生活につなげている。【主体性】 ○ 叙述をもとに、登場人物の相互関係や心情、場面等を捉えることができる。【読解】 ○ 自分の考えや意見を根拠を基に話したり書いたりすることができる。【表現】 ○ 友達との話し合い活動等を通して、自分の考えを深めることができる。【交流】									
月	ジャンル	単元名 教材名	時数	目標 ◎：重点目標 ★：単元を貫く言語活動 ◆：指導事項	評価規準	学習活動	関連領域・単元 (➡：以後の学習に活用, ➡：以前の学習を活用)				
							領域	単元名 教材名	評価規準		
10 5 11	文学的文章	6 作品の世界を深く味わおう やまなし「イーハトーヴの夢」	8 読⑧	○学習についての課題意識をもち、解決に向けて意欲的に学習に臨んでいる。 ◎場面の様子や主題等を読み取るとともに、発表や記述、交流等を通して自分の考えを深め、確かなものにすることができる。 ○目的に応じて同一作者の本や作品を選び、読むことができる。 ○文章中の表現を味わい、関心をもつことができる。 ★解説書を作る。(解説文を書く) ◆読(1)エ・オ・カ 伝国(1)イ(ケ)	【関】・学習の目的と身に付けた力を理解し、見通しをもって学習しようとしている。 【読】・学習課題を文章表現や資料から人物や場面等を読解・解釈し、引用や図表を用いるなど、根拠を明確にして表現している。(1)エ ・自らの考えを表現したり、友達と交流したりして自分の考えを深めている。(1)オ ・作品を解釈するために伝記を参考にしたり他作品と比べたりしている。(1)カ 【言】・比喻やオノマトペなどの文章表現の特色について関心をもっている。(1)イ(ケ)	1 これまでの学習を振り返る。 2 宮沢賢治について知る。 3 「クラムボン」は何かを考える。 4 学習計画を立てる。 5 「五月」と「十二月」のイメージを話し合う。 6 「やまなし」という題名について考える。 7 「イーハトーヴの夢」を読み、作品と賢治の生き方・考え方のつながりを考える。 8 課題を解決しながら解説書を作る。 9 解説書の発表会をする。	読 ➡	カ レー ライ ス	登場人物どうしの関わり合いと心情の変化をとらえ、感想をもっている。(1)エ		
							話 聞 ➡	学 級 討 論 会 を し よう	話題に対する自分の考え方、感じ方を表している。(1)オ		
							読 ➡	『鳥獣戯画』を読む	文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりしている。(1)オ		

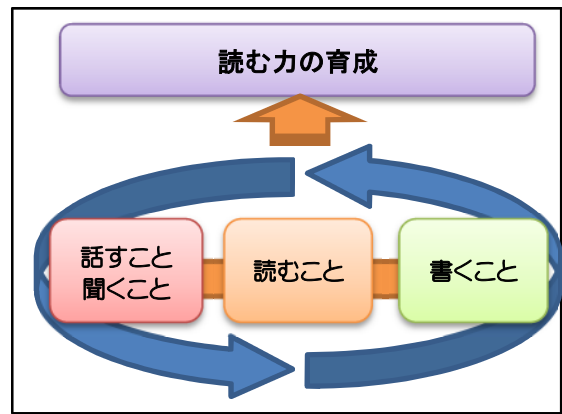


図9 領域相互の関連

(4) 学習過程の工夫

文学的文章を指導するために、「表現と交流を取り入れた読むこと（文学的文章）の学習モデル」を作成した（表3）。この学習モデルでは、一単元の学習過程を言語活動で細分化し、何をすべきか分かりやすいようにした。教師は、表左側の具体的な学習内容を基準に授業を構成していくことが効果的であると考え。第一次では、単元の初めに「つなぐ」という学習過程を位置付け、以前に学習したつながりのある単元を想起させ、系統の意識化を図るようにしている。第二次は、それぞれの一単位時間が「読解」、「表現」、「交流」を繰り返しながら解釈へつながるよう構成されていくようにする。第三次では、第二次での学習を生かし、自己の課題を解決し、自己評価や相互評価をする。

表3 表現と交流を取り入れた読むこと（文学的文章）の学習モデル

	次	過程	ねらい	具体的な言語活動
学習内容の系統の意識化	一	つなぐ	○ これまでの学習を振り返り、これからの学習に関連付けることができる。	○ これまで読んだ文学的文章で学習した内容や方法を想起し、発表し合う。 ○ これまでの学習でできるようになったことを振り返り、発表し合う。 など
学習への意欲付け		つかむ 見通す	○ どのような課題をもって学習を進めるのか考え、学習課題をつかむことができる。 ○ どのような流れで学習を行っていくのか学習計画を立てることができる。	○ タイトルから内容を想像し、発表する。 ○ 読書生活を振り返って読書計画を立てる。 ○ 読み聞かせを聞いて内容を知る。 ○ 音読をして、文章のリズムを味わう。 ○ 初発の感想を書いて疑問を明らかにする。 ○ 必要な学習内容や活動を話し合う。 ○ 学習課題を話し合う。 ○ 学習計画を話し合い、単元を貫く言語活動を設定する。 ○ 作者について調べたり話し合ったりする。 など
学習の必要感の自覚				
学習計画の立案	二	調べる	○ 調べ読みを進め、共通の課題を解決することができる。	○ 共通の課題や個別の課題を設定する。 ○ 読解したことを表現する（書く）。 ○ 自分と相手の意見の違いや共通点を見つけながら聞く。
文学的文章の主體的な解釈 ※「読解」「表現」「交流」を通して		深める	○ 自分の考えや意見を深めることができる。	○ 読解したことを交流する。 ○ 調べて自分の考えを書き込んだり吹き出しに書いたりする。 ○ 動作化したり役割演技をしたりする。 ○ 視点を変えてリライトする。 ○ 比べ読みをする。 など
学習内容の活用	三	生かす	○ 獲得した自分の言語能力を生かして、個別の課題を解決したり、表現したりすることができる。 ○ 作品を仕上げたり発表したりする。	○ 個別の課題について、想像する。 ○ 調べたことをまとめる。 ○ 関係のある本を読む。 ○ 音読発表会をする。 ○ 推薦の文章を書く。 ○ 紹介の文章を書く。 ○ 解説書を書く。 ○ 「～新聞」を書く。 ○ 読書会をする。 ○ 討論会をする。 など
学習のまとめ 自己評価 相互評価		まとめる	○ 学習で身に付いた能力をまとめたり、整理したりすることができる。 ○ 学習を振り返り、自己評価・相互評価をすることができる。	○ 学習を総括して、自らの読みをまとめる。 ○ 学習を振り返り、相互評価をする。 ○ 学習したことを振り返り、学習後の感想やできるようになったことを発表したり書いたりする。 ○ まとめの音読・朗読をする。 ○ 実生活で生かせる場を話し合う。 など

(5) 子どもが文学的文章を主体的に解釈するための手立て

ア 主体性をもたせるための導入部の学習

子どもが一単元を最後まで主体的に学習していくためには、導入部の学習が重要である。具体的には次のような手立てをとった。

(ア) 学習の必要感をもたせる

子どもに学習についての実態調査を示し、身に付けなければならない力を認識させる。また、子どもが身に付けていく力が日常のどんな場面で必要なのか、役に立つのかを話し合う。このように身に付けていく力を把握した後、子どもに題材への興味関心をもたせるために、作者や挿絵から想像を広げてみる方法も考えられる。

(イ) 学習課題の設定

事前のアンケートや実態調査、初発の感想等から子どもがもっている疑問や調べてみたい、学んでみたいという思いを把握する。それらを学習課題や一単位時間のめあてに設定することで子どものやる気を引き出し、主体的な学習へと導いていく。

(ウ) 学習の見通しをもたせるための学習計画表

学習計画を立てる際、単元の最後に行う表現活動（単元を貫く言語活動）において課題を解決するために何を学習すればよいかという視点をもたせ、話し合わせる。ゴールを見据えることで、学習の見通しをもつことができ、主体的な学習へと導いていくことができる。と考える。

以上のような学習課題や見通しをもたせ、単元を可視化できるよう、図 10 に示すようなワークシートの工夫も必要である。

Figure 10 is a worksheet titled "学習計画表" (Learning Plan Table). It is divided into several sections:

- Table 1 (Top):** A table with 8 columns and 1 row. The columns are numbered 1 to 8. The content in the table is as follows:

8	○「やまなし解説書」の発表会をする。 ※学習の反省を振り返り、これからの学習に生かす。	7	○「やまなし解説書」をやる（「やまなし」）	6	○「やまなし解説書」をやる（「やまなし」）	5	○「やまなし解説書」をやる（「やまなし」）	4	○「やまなし解説書」をやる（「やまなし」）	3	○「やまなし解説書」をやる（「やまなし」）	2	○「やまなし解説書」をやる（「やまなし」）	1	○「やまなし解説書」をやる（「やまなし」）	時	学習する内容
---	--	---	-----------------------	---	-----------------------	---	-----------------------	---	-----------------------	---	-----------------------	---	-----------------------	---	-----------------------	---	--------
- Section 2 (Middle):** A section titled "学習計画表" (Learning Plan Table). It contains a list of learning objectives and a section for learning goals.
 - Learning Objectives:**
 - ① 宮沢賢治が伝えたかったことや宮沢賢治の生き方、考え方を読み取ることをできるようになる。
 - ② 読み取った自分の考えを説明できるようにする。
 - ③ 友達の考え・意見を聞いて、自分の考えを深められるようになる。
 - Learning Goals:**

この単元でできるようにすること

目標を達成するための学習計画を立てよう。
- Section 3 (Bottom):** A section titled "個人で取り組む課題を決めよう。" (Let's decide on a task to work on individually.). It contains a list of tasks and a section for learning goals.
 - Tasks:**
 - ① 「上」「下」とは、何を表しているのか。
 - ② やまなしが落ちてきたとき、兄さんかにか「かわせみだ」と言ったのはなぜか。
 - ③ お父さんは、どうして「目が赤かったか」と聞いたのか。
 - ④ 作者は、ほかの作品でも造語を使っているのか。
 - ⑤ 「なめらかな天井」とは、何を表しているのか。
 - ⑥ 彼の作品からオノマトペを集める・比較する。
 - ⑦ 最後の1行の意味は何か。「私」とは誰か。
 - ⑧ なぜ、「トブ」ではなく「トブン」なのか。
 - ⑨ 「なめらかな天井」とは、何を表しているのか。
 - ⑩ 彼の親がいた川は深いのか、浅いのか。
 - ⑪ なぜ、他のくだものではなく「やまなし」だったのか。
 - Learning Goals:**

この単元でできるようにすること

目標を達成するための学習計画を立てよう。

図 10 見通しをもち、学習を進められるようにするためのワークシート

イ 読みの視点を明確にする

子どもは、課題解決のために文学的文章を読む際、ただ漠然と読んでしまい、目的のためには、何に注目すればよいのかが分からないことが多い。藤田⁶は、子どもが読解や解釈を進めていくためには、①説明表現、②会話文、③行動描写、④情景描写、⑤象徴的表現の五つに着目させることが大切であると述べている。本研究では、この五つを読みの焦点化を図る描写等として、活用することにした。そして、これらの中から、教材の特性に合ったものや課題解決のヒントになるものを選択し、更に具体的な読みの視点を与えるようにする。例えば、情景描写の中でも、「色」が出てくる言葉を拾い上げ、それが何を意味しているのか、どうしてそのように見えるのかを想像したり推論したりする。このようにして読みの視点を子ども一人一人が意識することで、学び方が分かり、主体的に解釈する力が身に付いてくるものと考えられる。

ウ 学習の手引きの活用

子どもの学習の手助けとなるものが学習の手引きである。大西⁷は学習の手引きについて、「学習の手引きは、子どもがそれによって手を引かれながら学習の主体として立ち上がり、やがて一人で歩き始めることができるものでなければならない。(中略)学習者一人一人を生かし、その個人差に応じて指導することと、学習者に学習法・学習力を身につけさせることとは、ひとまとまりのことである。学習の手引きは、これらのことを実現する手立てとして創案されたのである」と述べている。学習の手引きは、単に学習活動の進行をスムーズにするためのものではないことが分かる。本研究においても子どもが主体となって学習を進められるように手引き(図11)を作成し、活用を図った。

図11-1は、学習を振り返るための手引きである。1学期の学習を振り返るとともに、身に付いたことがどのように生かされるのかを考えさせ、学習の中に取り入れていくことを意識させることをねらって作成、活用した。既習事項を振り返り、思い出すとともに、その学習がどのように生かされるのかを知ることができる。

表4 読みの焦点化を図る描写等と発問例

読みの焦点化を図る描写等	発問例
説明表現	その説明から何がわかりますか。
会話文	どうしてそんなことを言ったのでしょうか。
行動描写	どうしてそんなことをしたのでしょうか。
情景描写	どうしてそのように見えるのでしょうか。
象徴的表現	それは何を意味しているのでしょうか。

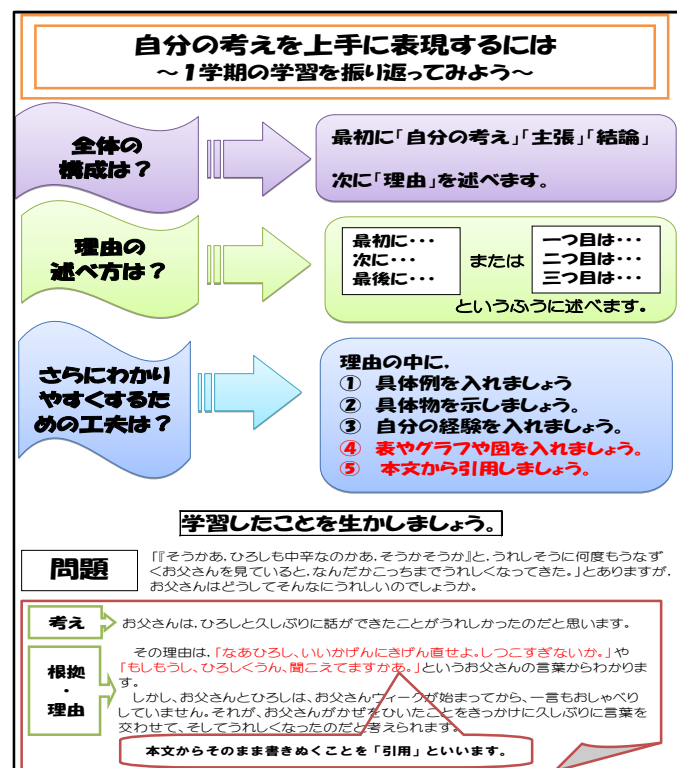


図11-1 学習の振り返りの手引き

⁶ 藤田伸一 著『「読みの力」を育てる文学・説明文の授業』2011 学事出版

⁷ 大西道雄 著『学習の手引きによる国語科授業の改善』1987 明治図書

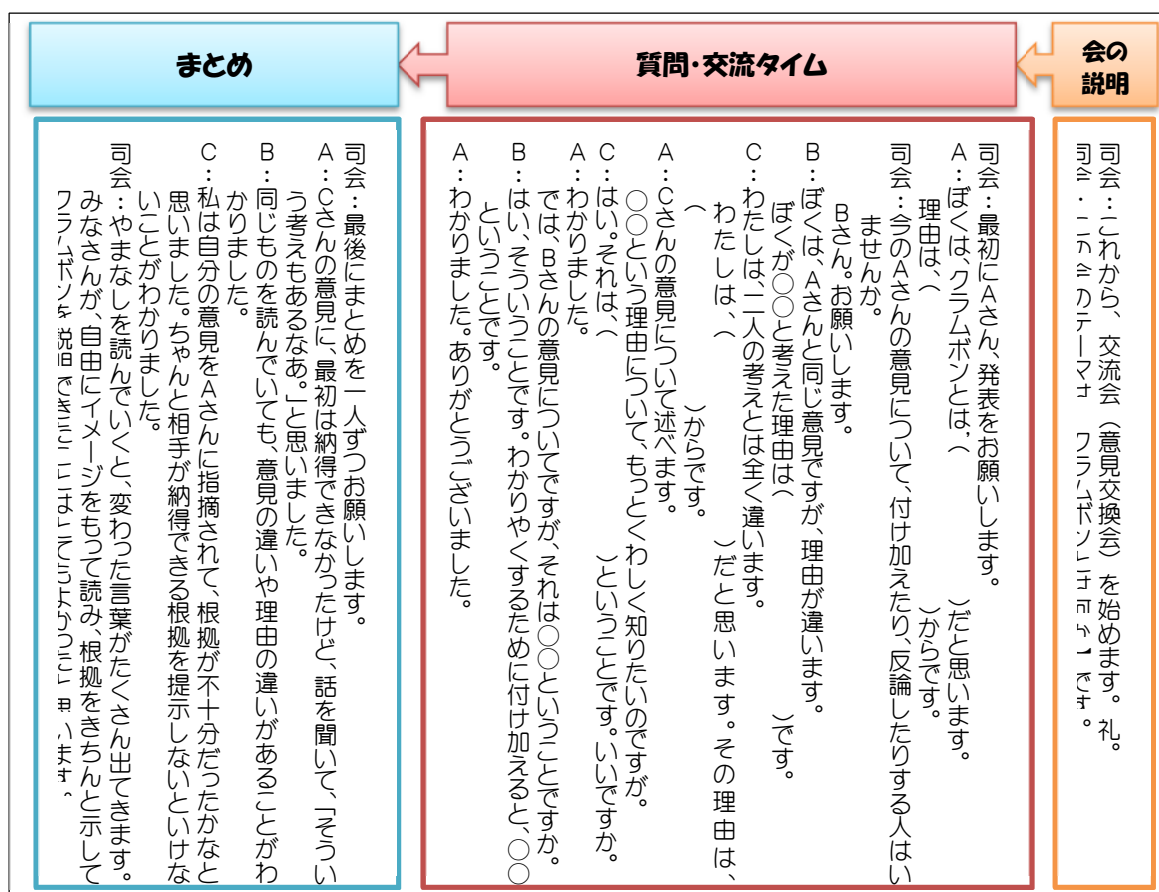


図 11－2 交流会・意見交換会の手引き

図 11－2 は、子どもが読みの交流をする際の手引きである。検証授業Ⅰでは、話合いの進め方の手引きがあり、それを活用して学級討論会を行った。検証授業Ⅱでは、学級討論会で使用した話合いの進め方の手引きの内容を読みの交流用に変えて使用させた。交流会の際に手引きを活用することで、交流会の進め方がつかめると同時に、自分の話したいことを整理でき、話すことができると考えた。

エ 表現構成の類型化

自分の考えを分かりやすく伝えることができる子どもが少ないという実態を踏まえ、子どもが自らの考えを表現する際の構成を「意見・考え」→「理由・根拠」という頭括型に一本化し、指導していくことにした。このことについては、検証授業Ⅰで話し方を身に付け、検証授業Ⅱでその学習を生かすという流れになっている。詳細については、次項について述べることにする。

意見や考えの根拠になり得る項目を話型とともに例示したのが下の表 5 である。まず、自分の意見を主張するには、はっきりと「断定」できる場合と、断定はできないが、様々な状況からほぼ確実であろうと「推定」できる場合がある。主張する際には、その点をはっきりとさせるように指導したい。

次に、根拠となる事項を 10 項目挙げた。学習の内容と場合にもよるが、自らの主張をより説得力のあるものにするためには、何を根拠にすると効果的なのかを考えさせたい。しかし、子どもに根拠となるものを自由に見付けさせることは困難である。そこで教師が根拠となり得る項目を選択し、指導していくことが望ましいと考える。また、最も効果的であると思われる項目を組み合わせ示すことも方法の一つである。

今回行った検証授業Ⅱでは、「事実（叙述）」「作者の情報」「引用」「資料」などを自分の意見・考えに説得力をもたせる根拠にするように授業を展開していった。